

2016年度第2回現代教養センターFD研究会 議事録 「様々な指標を活用した教育活動の質の向上」

実施報告

- 日時:** 2016年12月14日(水) 17:00~18:00
- 場所:** 15号館 4階 第2会議室
- 講師:** 前田泰樹教授
- 司会:** ニノ宮リムさち准教授
- 出席者:** 現代教養センター 21名
青木孝子 / 石原圭子 / 大江一平 / 岡田 工 / 岡本明弘 / 加藤次直 / 金山浩司 / 木村英樹 / 定岡利典 / 佐藤恵子 / 田島 祥 / 谷 晋 / 中村隆志 / ニノ宮リムさち / 東 慎一郎 / 福留恵子 / 堀本麻由子 / 前田泰樹 / 村松香織 / 吉田厚子 / 高橋 操 (敬称略)

1.開会の挨拶

現代教養センター 主任 岡田工教授

第2回のFD研究会にあたり前田先生にはGPAに関する話をはじめ、さまざまな評価方法等について、また、今後の新しい科目を行う上での成績の出し方などについても貴重な参考意見を伺えると考えている。さらに参加者の皆さんと意見交換を交え、実のある会になればと考えている。

2.「GPAと授業の質を両立する」

現代教養センター 前田泰樹教授

1) 講義設計の方針について

これまで「ふつうに頑張った学生がAになるように」という経緯があるが、AということはGPA=3.0が設定目標であるので、私は学科間の差を出来るだけ考慮し、2.5~3.5に収めるようやってきた。ただしGPAを上げるために授業の質を下げることは断じて行っていない。これは自分の目標でもある。現在の東海大学での文理共通科目「知識とコミュニケーション」の内容は、一橋大学社会学部の3、4年向けで開講している「コミュニケーション論」と基本部分は共通であり、レベルは維持している。その結果3年間でGPA=3.01となっている。確かにクラスにより多少ばらつきはあるが、だいぶ落ち着いてきたと考えている。

・文理共通科目と基礎教養科目について。

文理共通科目での「知識とコミュニケーション」は私の場合「社会学」が中心となっており、哲学・言語学・心理学を盛り込みながら、コミュニケーションについて話を基本としている。それに対し新カリでは真逆で、基礎教養科目の「社会科学」では、「社会学」は法学・政治学・経済学・経営学・社会福祉学・心理学・教育学等のディプロマの集合の一つであり、相対化して全てが見えるようにしなければならないので、方向性がこれまでとは異なるが、評価の方法として考えるならば、基本的には同じように対処出来ると考えている。

・成績評価方法について

GPAの安定に向け、成績評価資料を分担する。毎回の課題評価を積み上げることで成績向上を目指せると考え、1回の講義において60分講義を行い残り30分で課題を行わせる。1回につき5点配分とすれば10回で50点となる。これはあくまでも課題点であり、出席ではない。出席していても課題が解けなければ得点にはならない。さらに解けるまで終了させない方針で行っている。

2) 講義実演の説明

第1回と第10回に配布するプリントを参照する。もう1枚は課題の回答用紙。まず課題1について説明。3×3で9回分の講義とまとめの1回を合わせ10回の講義をそれぞれのテーマに添って60分ずつ行い、その後30分間で課題を行わせる。料理教室に例えるならば、始めに講師が60分の実演を行った後、生徒に同じように演習させるような方法で、10回の講習を行うようなもの。後は日常から自分たちの見つけたコミュニケーションに関する事例をとってきて、料理してもらおうように話をしている。

・テーマ1の「私たちは何をしているのか？」について

「人々の行為を理解すること」は、つまり社会学者だけがやっているのではなく、人々が普段から行っていることであると理解させる。学生に配布するプリントは穴埋めするように作られており、空欄を埋めながら参加することである程度理解度は高まっている。

使用している教科書のp.38にはp.6～p.8の要約が載っているのですが、それを写させているが、これはその日の講義概要を少しでも意識させた上で講義を聴いてもらうためである。限られた60分を有効に使うため、無駄話や余談はしないようにしている。

・第1回の授業では、社会学を作ったエミール・デュルケムの「自殺論」を紹介し、社会学者が自殺率を図るための自殺の定義について説明を行い、学生に事例について考えさせる。例として、「積極的な延命治療を拒否すること」や「自爆テロ」等は自殺に該当するかなど。実際は該当するとなるが、普段我々は別の分け方をしているのでは、というような話をしている。

・沢木耕太郎氏が書いた「おばあさんが死んだ」という事例を取り上げ、「栄養失調と老衰のため、寂しく死んだ」と報道された老女は、医師の死亡診断書では高度な栄養失調兼脱水症による「心不全」となっているが、この老女は生前から誰の世話にもならないと言って病院にも行かず、ケースワーカーも寄せ付けなかった。ケースワーカーはこの老女は自殺ではないかと考えたという事例。ここで「心不全」と「自損行為」という2つの記述について、何が違うのでしょうか？

ケースワーカーが、老女の死に関して「心不全」という死の原因の問いではなく、なぜ死ななければならなかったのかという理由について問うていることが見えてくる。

ポイントは、2つある記述が正解か不正解かではなく、それぞれの記述の目的が明確に見えるようになることが重要である。その上で学生には、このように記述の目的の異なる事例を探し出してくることを練習問題として課している。

・＜事例＞朝日新聞2004年10月26日

大見出し「切った小指送り『交際認めろ』」 小見出し「中3生の父脅迫 36歳容疑者逮捕」

→「切った小指を送る」という行為は、どのように記述されているか？

第一段落

「中学3年の女子生徒の自宅に自分の小指を送りつけ、交際を認めるように生徒の父親を脅したとして岡山東署は25日、岡山市乙多見、無職吉川広幸容疑者（36）を脅迫の疑いで逮捕した。吉川容疑者は小指を送ったことは認めたが、『脅していない』と否認している。」

第二段落

「調べでは、吉川容疑者は、岡山市内の中学3年の女子生徒（15）との交際について、父親の会社員（43）に反対された。これに腹を立てて9月下旬、切断した自分の右手小指を入れた小瓶と、『この指と代わりに娘さんと一緒にさせて下さい。受け取ってもらうまで何回でも送ります』と書いた手紙と一緒にポリ袋に入れ、生徒の自宅のドアノブにかけて脅した疑い。」

第三段落

「父親はこのポリ袋を吉川容疑者に返したが、10月上旬に再び送りつけられたため、同署に被害届を出した。」
この新聞記事全文を読み、切った小指を送るという行為そのものを「何だ」と記述しているか？二つのポイントを抜き出してみよう。（参加者には実際に書き出してみるよう指示）

送った側と送られた側では内容が異なる。一つ目は「脅迫」、二つ目は脅したのではないとすれば「お願い」あるいは「交際の申し込み」や「プロポーズ」となる。このように何故捉え方の内容が食い違ってしまうのか？その理由を書かせて提出させる。

実際の授業では学生の書いたものをその場で査読し評価する。できていない者は時間内で修正をさせる、あるいはその場で口頭により正解を促す。学生は授業の回数を重ねると次第に要領を得て、回答の正解率が高まり、実力がついてくると判断できる。

・参考資料の2枚目のプリントは10回目の授業で使用しているもので、簡略化はしているが練習問題等すべて明記されている。課題の内容も次第にハードルを上げているので、授業が進むごとにすらすらと回答できるようになり、日常のコミュニケーションを分析できるようになっていく。

・10回の講義によりコミュニケーションの分析能力を高めた上で、最後のレポート課題を課す。参考レポート課題「周囲の日常を見回して、どのような行為がなされたのが問題になっている事例を探し、行為の再記述や、カテゴリー集合の変更といった観点から論じなさい。」

3) 授業内容課題の授業時間内評価の紹介

・インタラクティブ性について

学生間でのインタラクティブなやりとりが容易にできる。希望者は議論してよいし、学生同士で教示も可能。また教師と学生とのインタラクティブなやりとりが容易にできる。教師が回りながら声を拾うことを「ガヤ」と言うが、その場でガヤを拾いながら、問題を深め質疑応答も簡単にできることがメリットである。

・学習達成度について

学習達成度とその都度確認できることもメリットである。90分の授業で完結するように進めているが、課題を達成するまで終了させない、できるまで指導している。

・学習達成度を学生自身が実感できる

反復するので第1回に比べて、第10回の時点で実力がついたことを実感できる。提出承認枚数が成績にも連動しているため、学生自身が達成度を実感できる。

・成績評価について

学生の側から自分の最終成績が予想・理解しやすい。50点得点なら、標準レポートで“A”

35点得点なら、標準レポートで“B” したがって成績に関する質問は、ほぼゼロである。

また、評価活動のかなりの部分が授業時間内に終わるので、履修者数が多く成績を出す段階で時間がかかるという苦労は少なくなる。さらに、GPAをコントロールしやすいというメリットがある。

デメリットとしては、授業時間内の教員側の集中力を要することが挙げられる。それと新カリになり選択ができなくなった場合、相性問題が懸念される。

4) 成績評価方法への問題提起

新カリキュラムにおける授業の工夫とは？ 多人数の採点評価を行うと考えると、基礎教養の授業では80人×5コマ×期=800人として場合、どのように評価すればよいか？ まずは成績評価のコストを適切に下げる必要がある。また成績評価方法をゆるやかに統一していく必要もあり、ともなうリスク管理や成績トラブルに関するリスクを減らすにはどうすればよいかなど、何を、どこまで行えばよいか等について、自分の考えを次にまとめる。

・成績評価のゆるやかな統一について

これまで試験問題等の統一を考えてきたが、分野間の違いが大きいなど非現実的であると思われる。形式要件を統一することも考えてきたが、むしろ各教員のこれまで積み上げてきたノウハウを活かせる形で考えたほうが良いと思う。たとえば、授業内課題（客観式）20点分は、今回報告した「授業内課題の授業内評価」方式を使うことができないか、また、ミニツッペーパーなどこれまで各教員が利用してきたものを応用することによっても代替可能ではないか、というように現在のシラバスを読み替えていくことにより、ゆるやかな統一ができるのではないかと考える。

あるいはGPAを高めていくという意識を統一する方が良いのではないかとも思っている。

教員によりGPAにあまりにも差があることは、学生からの不信感にもつながる。公平性が重要ならば、GPAが指標となり、高める意識を統一することが必要となる。しかし学科間で差異を完全になくすことは不可能であると思われ、せめて教員間のGPAを一定の範囲におさめることが重要であると思う。

・成績評価にともなうリスク管理について

成績でトラブルを起こさないためには、出来るだけ成績資料は分散していたほうが良いと考える。さらに学生から評価が見やすい方が良好であろうし、特に多人数であればトラブルは授業時間内に解決した方が良好。何より基礎教養については二人でひとつの単位を付けることになるので、リスク管理についてもある程度統一すべきであると考え、このような提起を行った。

質疑応答

木村 毎回行っている課題の点数を同じなのか？

前田 全員同じで、できれば全て5点としている。

石原 毎回学生を並べて評価するのと出席を加味してその管理はどうなっているのか？

前田 そのような意味では出席はとっていない。後で提出する者は数えている。学生の名前や答案の質等、しだいに把握できるようになり、それぞれに応じた指導を行っている。

石原 提出時に評価を行うと同時に、その時点で学生証で出席をとることも可能ではないか？

前田 可能だと思うが、当初より出席の手段とは考えていなかった。

堀本 学生を並べて評価をしている様子を以前に見たことがあるが、実際1人にどれくらいの時間をかけているのか？

前田 問題にもよるが、しっかり書けていれば5～10秒でできる。

堀本 人数が多いようだがどのくらいか？

前田 一番多かった時で230人くらいだった。最近は履修制限を行っているし、徐々に減少していてそれほど多くはない。80~100人程度。

堀本 30分で終わるのか？

前田 30分あれば充分。チェックするポイントが何箇所かあるので、書けているかどうかは見た瞬間に判断できる。

堀本 交渉するような学生がいるのでは？

前田 その場合には丁寧に答えている。学生通し教えあうのは良いが、だんだん同じような答えが続くようなことがあり、その時には逆に学生に質問をして本当に理解しているかどうかを確かめている。

堀本 最後までみきれないのではないかと？

前田 基本そのようなことはない。たとえ見切れない場合があれば全部提出させればよいと思うし、その時は学生に詫びて時間配分を間違った自分の責任だと考える。

堀本 並ばせるという行為は、学生にとって不満はないのか？

前田 東海大学の学生については全くない。一橋大学で同じことを行った時は不満が出たが。

佐藤 できるまで出し直しということだが、出さずに途中で退室する学生はいないのか？あるいはそれが累積してしまいスラッシュになる者がいるのでは？

前田 脱落するものは最初から出席しないので、そのような事例は殆どない。ごくまれに相性が悪くてそのような者も出ることがあるが、その場合ある程度こちら側も把握しているので、それなりに指導している。

佐藤 GPAが3ということは、スラッシュがかなり少ないのではないかとと思う。

ディスカッション

「成績評価方法への問題提起」について、3人程度のグループに分かれ、10分ほど意見交換を行った。

佐藤 前田先生の提案のように20点分は、出席点や毎回の授業での基礎的な知識や考え方などが身に付いた事への配点とし、例えばミニッツペーパーや授業支援システム等を使って得点を確保させておいて、後はそれらを利用した形で最終的にはレポートみたいなもので、自然科学などの場合では最終的には社会との関連性とか日常的な関わりのようなものを考えさせるような形で30点を配点する。それもミニッツペーパーや授業支援システムなどを利用し、ある意味で自動的に採点ができるようにすれば、教員の負担も軽減できるし学生にも理解しやすい評価をだせるのではないかと。

二ノ宮リム (司会)

自分たちのグループでは、学生たちの間で課題に取り組む姿勢に差がある場合、努力して提出した学生が、ただ出しただけの学生に対し不満を持つのではないかと。このような場合どのように対処すべきか等、今後の課題であるという意見が出された。

前田 出しただけと言っても、前60分の講義を聴いていなければ答えることは不可能であり、それなりに課題に取り組んでいると判断しているので、頑張っていないわけではないと考える。

二ノ宮リム

前田先生の授業に関してということではなく、各分野の先生方において、例えば知識の量や概念の理解に対して、ミニッツペーパーのようなもので記述していくときに差が出る場合にどうすればよいか？ということでは誤解があれば申し訳ない。

閉会の挨拶

現代教養センター 所長 佐藤恵子教授

今後とも新カリキュラムに向けて評価の方法を皆さんで話し合っていきたい。